二〇一一年度　一般二月入学試験　二月六日

国　語

〔注　意　事　項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は28ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があってから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国語

（60分　100点）（解答番号 1 ～ 44 ）

第一問　次の文章は、幸田文『きもの』の一節で、るつ子が病床の母のために蒲団を作ることをおばあさんに相談したところ、使い古しの友禅縮緬(注1)を材料に仕立てることになった場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（40点）

かつてこの家のうちにあったことのない、派手な蒲団が作られることになった。

その蒲団ができてきたとき、るつ子は見惚れて、はしゃぎだすほど喜んだ。おばあさんのいった通り、大柄模様は上品だった。大きな枝松にこまかいこぼれ紅梅をあしらった柄が、いかにも古々しくて好かない気がしたのに、出来てみると好かないどころか、思いのほかのいい蒲団になった。なんだかそわそわと、じっとしていられない嬉しさで、そこへ延べた蒲団をるつ子はいじってみる。しぼが立っているくせにしんなりと、縮緬はジュウ軟(1)だった。そしてそのジュウ軟な縮緬にくるまれた綿がまた抵コウ(2)せず、押されれば沈み、はなされればふうっと元通りにふくらむ。これまでにるつ子の知っている最高の蒲団は、上の姉の八反(注3)だが、いまこれを見て比較すれば、八反はどことなく取りすましたような(3)、ひとりで勿体ぶっているように思える。縮緬は布としての格が八反よりいいのか落ちるのか知らないが、こうして蒲団につくってみれば、模様や色どりのたのしさ、それになによりも触った気持ちのよさが、ずっと上だとおもう。

「なんだか知らないけど、縮緬の蒲団ってひどく嬉しいものね。気に入っちゃった。」

「縮緬でなくても、蒲団を新しくするのは嬉しいものなのさ。たとえ木綿縞のごつごつだって、こしらえたてのときには、わざと二階の手摺へ干すひとがあるくらいだもの。」

「へえ。なぜ蒲団が特別うれしいのかしら。」

「あたしが思うにはね、嵩の大きいせいもあろうかとねえ。なににによらず嵩が大きいと、億劫だからね。その億劫なことをこら

えてしたんだぞ、と思うとすうっとするんだよ。それでまあ、さりげなく人にも吹いてみたいような気がして、二階からぶら下げるのさ。(4)

「ふうん。嵩が大きいせいねえ。」

「そうだろうじゃないか。箸より茶碗だろ、下駄箱より箪笥だろ、箪笥より家屋敷だろ。新しくうちを建てたひとなんかに逢ってごらん。そりゃもう上機嫌で大喜びで、いやになっちゃうよ。」

身に纏うものの中では、蒲団はなるほどいちばん嵩高だが、大きなものをふりまわせば大きいだけの喜びがあるのだろうか。それにしても縮緬の蒲団は魅力があった。病む母のためというツツシみがあるから控えているものの、ちょっとの間でいい、自分がそこへ横になって、どんなにしなやかか試してみたい気がしきりである。そんな浮き浮きしたるつ子へおばあさんは注意する。いま敷いているのと取り換えるのは、父か兄かが帰宅してからにしたほうがいいという。(5)

「素直には喜ばないかもしれないからね。」(6)

そんな筈はない。筈はなくても実際にはひっかかる。なぜ。だって今迄したこともない贅沢だもの——お母さんというひとは、そういう固い気持ちでくらしてきたひとなんだから、いきなりこの蒲団を突き出せば、はっとして、渋っちまう。まさかそんなことはない、びっくりして喜ぶにきまっている。どうかねえ、あたしはそうは思えないがねえ。

おばあさんは蒲団の話はもう打ち切りにして、夕方の買物に出ていった。やがて兄、つづいて父も帰ってくるだろうし、おばあさんの言葉も残っていないわけではなかったが、るつ子はじっとしていられなかった。しゃべりたくてたまらないが、うちには誰もいない。自分ひとりの間がもてなくて、そして、なにか早く知らせたくて、ふわふわと母の部屋へいった。

「お蒲団こしらえたのよ。とてもいいのができたわ。きっと気に入るわよ。」

「え？」

よく聞こえなかったような、ぼんやりした目付きだったので、るつ子は様子をうかがっていた。母はだんだん強い目になると、上をむいたまま静かにものをいった。

「蒲団を作ったの？」
「ええ。」
「だれの？」
るつ子はしくじったとわかって狼狽(ろうばい)(7)したが、もうおそい。問いただされる形になった。きくだけきいて、母はだまってしまった。はっきり母は喜んでいない。気押されて、立とうと腰をうかすと、るつ子、と呼ばれた。見ると顎(あご)の下で襟をおさえている手が、荒くなった呼吸といっしょに上下していた。
「なぜひと言、あたしに相談かけてからにしないの。おばあさんでさえ、いつもあたしを立てて(8)(9)下さるのに、あなたはまあどうしてこう、ずけずけと勝手にするんだろう。」
いけないと思うとひとりでにうそをついて逃げだした、ごめんなさいお母さん、お鍋が掛けてあるの、と。
母を病人だ病人だと思っているのがるつ子、でも母のほうでは自分は、たとえ病んでいても、一家の主婦であり、妻であり母である、ただ病人というだけのものじゃない、という意識がある、そこがこんな結果になる元で、るつ子の考えが足りない、その点おばあさんはよくわかっていて、第一に主婦として、そのつぎに自分にとっては嫁として、そしてそれがいま病んでいる、といったようにちゃんと順序をつけたやりかたをしている、だから［10］がないのだ、と兄はいう。
「そんなに主婦の意識って偉いものなの。」
「見当ちがいなことをいうなよ。偉いんじゃない、哀(かな)しいんだよ。今迄ずっとしてきた仕事が急になくなっちゃって、ただ病気だけが相手じゃ、生き甲斐(がい)は消えちまうじゃないか。」
そういうふうに考えるものなのか、とはじめて知った。ただ快いようにとだけでは、通らない、こちらの思うのとあちらの思うのとがちがえば、親子の中でも愛情は無慚(むざん)についえ、感情はそこなわれる。やはりおばあさんの勝ちだったが、母によくしよう、喜ばそうとした気持ちがこう苦茶苦茶になって、この負けた心をどうまとめたらいいのかとおもう。
「親孝行もしつけないうちは、そんなものだよ。いい機嫌になったところで、ぴしゃっとくるからおどろくのさ。」(11)

身におぼえの話をおばあさんはする。世帯をもって、(12)いっぱし気の利く女房になったつもりで、さとの母親にお小遣いをもっていったときのいい気分、そこであれこれそのお小遣いの使い道なんかをしゃべっていると、母親が苦笑いをして、親切はありがたいが、こううるさくては有難迷惑だ、このでんで(注4)やられてあちらのお姑さんがだまっているとすれば、そりゃよほど出来たひとだ、といったという。だからるつ子の母が、最初の紙包みをはにかみながらさしだして、言葉すくなに挨拶をしたときは、自分の若い日にひきくらべて、やさしい嫁だと思ったそうな。

「お父さんはどうだったの。」

「男はあっさりしているよ。一番だめなのは、実の娘だね。せっかくの気持ちを自分でぶっこわすようなまねをしておいて、そのあげく愛想づかしなんかいってね。元も末も台なしにしちまう。手に嵩張っちゃうんだねえ、しなれない仕事は。」

兄とおばあさんがとりなして、夕食後そこへ蒲団がもちこまれた。わるくないな、と父も一言そえた。(13)ハバも丈もたっぷりしていたから、洗濯縮みした紅梅織のシーツは似合わなかったし、枕も枕ぎれも掛け蒲団もちぐはぐだった。これをみな新しくするには、どう話したら素直にいくだろう、と思ったとたんに母が、るつ子が役に立ってきたらしいから、これを手はじめに家中の寝具を作り直したらどうか、といいだした。るつ子はぎょっとしたがおばあさんは平然と答えた。

「そうだねえ。お母さんが積もっておいてくれたから、仕事はもう半分済んでるようなもので、わけはない。」

いえ、あれはまだあら積もりだが、とかねがねの用意が姑に認められた満足で、(14)母は晴れ晴れした表情をしていて、かわいそうだった。

「とにかく順々で、いまはお母さんのから手をつけはじめたのだから、続いて掛けるものをもうひとつ。これはお父さんもさっきそういってねえ、それはまた相談するとして、さあ、新しい蒲団へ引っ越してもらおう。るつ子は今迄のをあっちへ持っていきなさい。」

父が掛け蒲団のことを本当にいったか、この場の機転なのか、それに病人へのこの心づかい、この段取りのよさ。おばあさんは利口だと感心する。だがそのおばあさんを頭に頂いて暮らしてきた母を、ふとおもいやるのだった。かわいそうである。どん

なに励んでも、姑に上越すことはできなかったろうし、一生あとへついて歩いたのは、どんなに気詰まりだったろうか。多少興奮ぎみの母は、短いシーツをめくって縮緬をじかに撫でてみていて、この布ももう十七年か八年になる、と数える。るつ子にはただ小さい時に着せられたというだけの古縮緬だが、母には子の幼い面影も、当時の自分の若い姿も、何処(どこ)へ行って何をして、風が吹き花が揺れたことも蘇(よみがえ)るらしく、おばあさんは快カツ(15)に相手をしていた。どんな微妙な道を来たか知らないが、姑と嫁とが長く相伴って来たのでなければ、こうした共通の古い話題を親身になって、なつかしみあうことはできまい。古い縮緬は義理の親子をつないでいた。母親が行李(こうり)(注5)の底に保存しているものを、子は迂闊(うかつ)に廃棄したり、使ったりしてはいけないわけである。

（幸田文『きもの』による）

（注1）縮緬――表面を細かく縮ませた絹織物。
（注2）しぼ――織物の表面の凹凸。
（注3）八反――「八反織」の略。厚地の絹織物。
（注4）でん――仕方。やり方。
（注5）行李――竹や柳で編んだ衣類を入れる箱。

問1 傍線番号(1)・(2)・(5)・(13)・(15)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 **1** ～ **5**

(1) ジュウ軟 **1**

① 教育費にジュウ当する
② 反対派を懐ジュウする
③ 研究にジュウ事する
④ 戦闘でジュウ創を負う
⑤ 交通ジュウ帯になる

(2) 抵コウ **2**

① コウ名心にはやり失敗する
② コウ拙より速度を重視する
③ 用語をコウ義に解釈する
④ コウ生物質を経口摂取する
⑤ 不祥事によりコウ迭される

(5) ツツシみ **3**

① ライバルにシン勝する
② 国会での勢力をシン張する
③ 長期の謹シン処分を受ける
④ 発言のシン否を確かめる
⑤ あの報道はシン小棒大だ

(13) ハバ **4**

① 政治不信が増フクされる
② 黒い布でフク面をする
③ フク業でお金を稼ぐ
④ 電話番号をフク唱する
⑤ フク利厚生のよい会社

(15) 快カツ 5

① カツ字離れについて考察する
② 問題の早期解決をカツ望する
③ 詳細な報告をカツ愛する
④ 全体を包カツする
⑤ 上司が部下を一カツする

問2 傍線番号(3)・(4)・(7)・(9)・(12)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 6 ～ 10

(3) 取りすました 6

① とりつくろった
② 色っぽい
③ きどった
④ 安っぽい
⑤ 地味な

(4) 吹いてみたい 7

① 勧めてみたい
② 分けてあげたい
③ 手伝ってあげたい
④ 言いふらしたい
⑤ ねぎらってもらいたい

(7)

狼狽した 8

① 緊張して冷静さを失った
② 慌ててうろたえた
③ 落ち込んで後悔した
④ くやしくて腹を立てた
⑤ ばつが悪くてやりきれなかった

(9)

立てて 9

① 評価して
② 信頼して
③ 心配して
④ 擁護して
⑤ 尊重して

(12)

いっぱし 10

① きわめて
② 一人前のような
③ 少しは
④ ようやく
⑤ 気づかぬうちに

問3 傍線番号(6)「素直には喜ばないかもしれないからね」とあるが、この発言には「おばあさん」のどのような意図があるか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 **11**

① 縮緬の蒲団を作ったことが母の怒りを招くのだということに気づかせ、るつ子に反省を促そうとしている
② 蒲団を新しくしたことを契機に娘が母の世話をすることの大切さを、るつ子に教えようとしている
③ 蒲団を新調したことで母の気持ちを損ねないよう留意して振る舞うことを、るつ子に忠告しようとしている
④ 縮緬の蒲団程度で母からの感謝を娘が求めるのは良くないと、るつ子をたしなめようとしている
⑤ 兄や父がいれば母が本来の素直さで喜びを表現するはずであることを、るつ子にほのめかしている

問4 傍線番号(8)「なぜひと言、あたしに相談かけてからにしないの」とあるが、このときの「母」の気持ちの説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 **12**

① 家庭内における主婦の立場をないがしろにされ、るつ子を責める気持ちが抑えられずにいる
② 大切にしまっておきたい縮緬を勝手に持ち出して使ったるつ子を、どうしても許せないでいる
③ るつ子が自分勝手な好意を一方的に押しつけてくるので、すっかり愛想を尽かしている
④ 自分を病人扱いして布団まで作ったるつ子の余計なお世話に対して、苦々しく感じている
⑤ 母親に配慮することができないるつ子を見損ない、八つ当たりせずにはいられないでいる

問5　空欄番号 10 に入る語句として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 13

① 異変　② 疑念　③ 過信　④ 苦悩　⑤ 摩擦

問6　傍線番号⑾「親孝行もしつけないうちは、そんなものだよ」とあるが、どういうことか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 14

① 子供は親孝行のつもりでも、本当は親のためを思ってではなく自己満足のためにしているにすぎないということ
② 子供は自分で思っているほどたいした親孝行はしていないので、子供が期待しているほど親は喜ばないということ
③ そもそも親孝行というものは、親にとってはおしつけがましく、余計なおせっかいでしかないということ
④ 子供が努力をしたところで、親に受け入れる気持ちがない以上、ありがたく受け取ってはもらえないということ
⑤ 子供が親を大切に思って尽くしても、親への愛情がうまく伝わらないことが往々にしてあるものだということ

問7 傍線番号⑭「母は晴れ晴れした表情をしていて、かわいそうだった」とあるが、なぜ「るつ子」は「かわいそう」と思ったのか。その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 **15**

① これまで利口なおばあさんに頭の上がらなかった母のことを思うと、病気になったことでますます遠慮しながら生きていくしかない母が不憫（ふびん）に思えたから

② 機転の利くおばあさんによって面目を施してもらったことを喜ぶ姿の裏に、おばあさんの御機嫌を取ろうとする母の気持ちが隠れているようで哀れに思えたから

③ 母のうれしそうな笑顔を見るにつけてもおばあさんの知恵にはかなわない自分の無力さが痛感され、不甲斐ない娘をもった母が気の毒になったから

④ 細やかな配慮の行き届いたおばあさんに嫁として仕えることは相当に骨の折れることであったろうと、母のこれまでの気苦労がしのばれたから

⑤ 母がおばあさんの前では気持ちを表情に出さないことを知っていたので、晴れ晴れとした表情の裏にある母の苦々しい気持ちが痛々しく感じられたから

問8 この作品で「古い縮緬」はどのようなことを象徴しているのか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 **16**

① 他人には知ることのできない数々の葛藤（かっとう）を乗り越えてようやく和解した、母とおばあさんの関係改善

② 同じ屋根の下で様々な苦楽を共にしてきたおばあさんと母との間に生まれた、義理の親子の絆（きずな）

③ おばあさんと母とが同じように苦労し、子育てを通じて二人が分かり合えた、るつ子の成長の軌跡

④ 年が離れていて、互いに共感することの少なかったおばあさんと母とが、唯一共感し合える家事の苦労

⑤ 古いものを見直すという行為により、おばあさんと母とが理解を深めあった、二人の相互理解のきっかけ

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（40点）

社会学者ジョン・アーリは、ミシェル・フーコー（一九二六―八四）による〈まなざし〉の概念に基づき、「観光のまなざし」もまた、社会的に構造化され、組織化された(1)視覚の制度であると指摘した。彼は「〔観光という：引用者注〕体験の一部は、日常から離れた異なる景色、風景、町並みなどにたいしてまなざしもしくは視線を投げかけることなの」であるという。そのうえで彼は、写真とは「見ることの、記録することの、社会的に制度化された一方法である」と述べ、写真と観光のまなざしの関係について、次のように述べる。「旅行とは、出掛ける前に、原型として既に見ているイメージの、自分用に(2)焼き直したものを、現地で指差して、そこに確かに来たということを証明する作業に結局はなっているのだ。写真は、従って、観光のまなざしと親密に結びついている」

ではここで、近代的な観光の誕生に目を向けてみたい。写真の発明（一八三九年）に遅れること二年、一八四一年にトーマス・クック（一八〇八―九二）によって、はじめての団体(3)シュウ遊旅行が企画され、大成功を収めた。これが、一般的に、近代的な観光旅行（tourism）のはじまりとされる。歴史家ダニエル・ブーアスティンが指摘したように、巡礼や商用などに代表される前近代以来の旅（travel）がおもに何かを「する」ための旅であったのに対し、近代の観光（toursim）とは、メディアに用意された何かを「視(み)る」ための旅である。彼は、複製技術革命と交通技術の進歩を受けて、受動的な「疑似イヴェント（Pseudo-event）」を楽しむ観光者が登場したという。その結果、旅行は、「一つの活動――経験・［　4　］――ではなくなり、その代わりに一つの商品になった」と彼は述べる。

トーマス・クック社が初期に企画したのは、主としてイギリス国内旅行であったが、次にヨーロッパ全域、さらには欧米列強による世界的な植民地化が進むにつれ、観光産業の(5)網目は地球全体を包み込むようになった。一八七〇年代には、ついに世界一周旅行までが可能になる。ここにテクノロジーによって安全に囲い込まれた危険がない旅――すなわち〈観光〉――が姿を現す。観光者は、あらかじめガイドや旅行社によって推薦された旅程をたどり、場所から場所へと経巡る。社会学者・橋本和也は、観

光を「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして売買すること」と定義している。

そうした観光の成立に大いに寄ヨ(7)したのが、十八世紀に流行したいわゆるピクチャレスク・トゥアーであった。[8]、イギリスの湖沼地帯を歩き回り、ピクチャレスクな景観を見つけ出すことをシ(9)上の目的とする旅のことである。社会学者ジュディス・アドラーはピクチャレスク・トゥアーのキ(10)源について以下のように述べている。

従来は科学に忠実に根ざしたものであった旅行者の〈眼〉は、十八世紀の終わりごろまでには、次第に〈目利き〉という新しい規律に従うものとなってきた。訓練された〈眼〉は、思慮深く芸術作品を同定し、それらを様式によって分類し、それらの美的価値について権威的に判断を下すようになった。それは、旅行そのものが修養を意味し、〈趣味〉を誇示する機会となっていくのと軌を一にしていた。

すなわち、美術史家が美術品を観察、記述し、同定・分類した後、価値判断を下すのと同じ過程を、観光者も風景に対しておこなうようになるというのである。ただし、ピクチャレスクなものを見出すことができる目利きとは、修練を積んだ一握りのエリートにかぎられる。とはいえ、そうした目利きが書いたガイドに従い、その指示どおりに風景を見れば、素人でもピクチャレスクな風景を楽しむことができるようになる。このようにして十八世紀後半からさまざまなガイドが出版され、そのフォーマットは、ピクチャレスクの大衆化にともなって、十九世紀の観光ガイドにも受け継がれていく。

このようにして、全感覚的な体験を中心とした旅＝トラヴェルは、メディアによって指示されたものを見る観光＝トゥーリズムに変容した。観光旅行とは、すなわち視覚文化の一形態でもあったのである。美術史研究者ジョン・テイラーは、ジョナサン・クレーリーが指摘する十九世紀初頭における視覚の様態の変動を踏まえたうえで次のように語る。

〈視覚的なもの〉は、写真術や大量生産技術が登場する遥か前から、医学、農業、工業、経済などの諸領域において、〈正

常性〉を判定するうえで用いられてきた。十九世紀の終わりになると、視覚が慣習によって組織された作業＝労働の一様態であるという考え方と、トゥーリズムをも含んだ大衆市場に対する大量生産という〔資本主義の：引用者注〕思想が調和するようになった。

ヴォルフガング・シヴェルブシュが(11)看破したように、十九世紀後半の鉄道の発達の結果、ヨーロッパ人の知覚は(12)劇的に変化したという。産業革命以前の旅において、旅行者は自らがそのなかに含まれる前景を(13)チュウ介として、つねに景観と同一空間に属していた。ところが、高速で移動する鉄道の車窓から、飛び去るように過ぎていく前景をとらえることは不可能に近い。ここにおいて、車上の人と景観の間には「ほとんど実体なき境目」が挿入されることになった。この前景なき空間認識を、シヴェルブシュは〈パノラマ的視覚〉――(14)刹那（せつな）的、印象派的とも言い換えられる視覚体験――と呼ぶ。あるパリのジャーナリストは、次のように述べる。

ごく数時間の間に、鉄道はフランス全土をあなたに上演して見せ、あなたの眼前に全パノラマを繰り広げる。

「パノラマ的にものを見る目は、知覚される対象ともはや同一空間に属していない」とシヴェルブシュはいう。鉄道とは単に革新的な技術であるだけでなく、それを利用するブルジョワたちの知覚そのものを変容させる文化装置であった。十九世紀後半に観光旅行に赴いた人々は、すでにこの知覚の変容を体験していたと想定できる。観光者たちは、自らと同一空間にある景観ではなく、あくまでも離れた、奥行きがない平面として景観を見る。その光景は、［15］の移動にともなって、次々と過ぎ去っていくものであった。この知覚の変動のうえに観光旅行が成立したのである。

それは、たとえば近代の産物である万国博覧会で、並べられたさまざまな商品を次々に見て回り、いわば視覚的に消費していく行為と似かよっているのではないだろうか。都市の遊歩者がさまざまな視覚的情報を受容する態度とのアナロジーで考えるこ

ともできるだろう。十九世紀のパリなどの大都市に出現した遊歩者（フラヌール）たちは、ひたすら歩き回り、ときには立ち止まりながらも、都市の視覚的情報を集中することなく受容し続ける。万国博覧会の開催、百貨店の登場やショーウインドーの出現などによって、(16)それは加速される。アン・フリードバーグは、こうした視覚の変容を「移動的な視覚（mobilized visuality）」の登場として描く。

このようにして、観光のまなざしでは、風景は一種の消費財となるのである。世界中の見るべき場所、すなわち sight-seeing に適した場所が世界中から選別され、ヨーロッパに運ばれ、商品となった。その景観を運んだ乗り物――メディア――こそが写真だったのである。すなわち、観光者とは、(17)写真と観光という十九世紀後半に成立した視覚的制度のエージェントであったといえよう。

（佐藤守弘「観光する写真家」による）

問1 傍線番号(1)「視覚の制度」とあるが、それはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 **17**

① 視覚が日常から遊離し、自分たちを束縛するものになっているということ
② 目的を忘れ、ただ見ることだけを楽しむように強制されているということ
③ ものへの視線が、一種の文化として社会の中で規範化されているということ
④ ものを見ることが、政治のあり方との結びつきを強めているということ
⑤ 視覚が産業と結びつき、資本主義という制度の一部になっているということ

問2 傍線番号(2)・(5)・(11)・(14)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 **18** ～ **21**

(2) 焼き直した **18**

① 少し手を加えて作り変えた
② 完成品として仕上げた
③ 一から新たに作り直した
④ もう一度同じものを作った
⑤ 間違いを訂正して元通りにした

(5) 網目 **19**

① 複雑に入り組んで存在していること
② 重要なポイントに存在していること
③ 同じものが整った形で存在していること
④ 漏れのないように張り巡らされていること
⑤ 目立たない状態で支配していること

(11) 看破 **20**

① 大胆な仮説を立てること
② 正々堂々と主張すること
③ 表にあらわれないものを見抜くこと
④ 対立する意見を説き伏せること
⑤ 常識とされていることを覆すこと

(14) 刹那 **21**

① 斬新な切り口
② 大雑把なとらえ方
③ 研ぎ澄まされた感性
④ 広い領域
⑤ きわめて短い時間

問3 傍線番号(3)・(7)・(9)・(10)・(13)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 **22** ～ **26**

(3) シュウ遊 **22**

① シュウ目の一致するところ
② シュウ末は温泉に行く
③ 用意はシュウ到だ
④ シュウ職活動を始める
⑤ 問題点をシュウ約する

(7) 寄ヨ **23**

① ヨ備のタイヤ
② ヨ韻が残る
③ 名ヨある賞
④ 銀行にヨ金する
⑤ 給ヨの明細

(9) シ上 **24**

① 図書館のシ書
② シ近距離
③ 有シ以来の出来事
④ シ終笑顔を絶やさない
⑤ 篤シ家が寄付する

(10) キ源 **25**

① キ日までに送る
② キ礎を固める
③ 人生のキ路に立つ
④ 戦地からキ還する
⑤ 朝早くキ床する

(13) チュウ介 **26**

① 勢力が伯チュウする
② 主君にチュウ誠を誓う
③ チュウ立公平な立場
④ 植物エキスをチュウ出する
⑤ 軍がチュウ留する

問4 空欄番号 4 ・ 8 ・ 15 に入る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 27 ～ 29

4 27

① 思い出
② 趣味
③ 仕事
④ 文化
⑤ 娯楽

8 28

① それで
② だが
③ むしろ
④ しかも
⑤ すなわち

15 29

① 主体
② 客体
③ 実体
④ 全体
⑤ 媒体

問5 傍線番号(6)「そうした観光」とは何か。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 30

① 巡礼や商用など達成すべき目的をもつ観光
② 安全性が高く大衆に人気のある観光
③ 遠く離れて知らない場所の景観を楽しむ観光
④ あらかじめ指示されたものを見る観光
⑤ 見るべき価値のあるものを同定する観光

問6 傍線番号⑿「劇的に変化した」とあるが、どのように変化したのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 **31**

① 車上の人は、鉄道の窓という境界に隔てられることによって、景観と同一空間に属さないため、パノラマ的な視覚へと変化した

② 高速で移動するため、前景をとらえることができず、実体なき境界によって隔てられた平面として、景観を見るように変化した

③ 飛び去っていく前景を瞬時にとらえることは不可能なため、継続する時間の中で全体像を把握する、印象派的な視覚へと変化した

④ 自らがその中に含まれる前景をとらえることが不可能になり、奥行きのない平面を介して、全感覚的に景観をとらえるよう変化した

⑤ 自分と同一平面にある景観ではなく、あくまでも距離をとって立体的に広がり過ぎ去っていく、パノラマ的な視覚へと変化した

問7　傍線番号⑯「それ」の指す内容として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 32

① 都市の視覚的情報
② 観光旅行
③ 近代の大都市
④ 視覚的消費
⑤ 都市の遊歩者たち

問8　傍線番号⑰「写真と観光」とあるが、両者の関係を説明したものとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 33

① 視覚の変動を受けて観光が出現し、その結果、出かける前に自分なりのイメージを持つために写真が必要となった
② 写真は観光という視覚の制度を生み出したが、写真のイメージと実際の景観は食い違うため、補完し合う関係にあった
③ 観光とは、写真によってもたらされたものを見る疑似イヴェントから、写真に消費される単なる商品へと変化した
④ 観光とは、自分の目で風景の中に美的価値を見出す行為であり、自分がそこにいた証拠を残すために写真が要請された
⑤ 写真などの複製技術は、メディアによって指示されたものを見る、商品としての旅行である観光の登場を促した

問9　本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 **34**

① 十九世紀における視覚の変動によって、観光旅行者は、万国博覧会の観客や都市の遊歩者と似通った、移動的な視覚を持つようになった

② 産業革命は鉄道を生み、人間の知覚そのものをも変容させたが、それによって人々は、日常のありふれた風景を再発見するようになった

③ 旅行者の目は、従来から科学に忠実であったが、自らの目でピクチャレスクな景観を見つけ出すようになると、さらにその傾向は強まった

④ 世界的な植民地化によって世界一周が可能となり、旅は安全を確保され、時間をかけてゆったりと風景を楽しむものへと変容していった

⑤ 大衆の多くは、風景を楽しむという趣味を持つことができないため、観光ガイドに頼り、それが指示するものを消費するだけになっている

第三問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（20点）

かういふあひだに、秋になりにけり(1)。この男の家には、前栽などいとおもしろう植ゑて、菊など咲きてありと聞きて、この女のもとより、「そのおもしろかなる菊一枝折りて(2)」といひおこせたりければ、その使ひに問へば、「人の御文奉れたまへる御返しに、つけたまはむとなり」といへば、あるよりは心憂くもあるかな、われよりほかに、またいふ人の返りごとをもしける、と思ひて、いとおもしろき枝をおし折りて、かういひやる。

花も香も残る菊ともなりにしがわれよりはまたあらじと思はむ(3)

といひければ、使ひをぞ、「いかがいひつる」と問へば、「あるままにこそは」といへば、返し、

濡れかへりせかれぬ水脈にひかれてぞわれさへ浮きて流れよりけむ(4)

とあるに、また、男、たちかへり、

わが深き心の水脈のとくはやく流れくればぞ君も浮きいづる

「いつしか暮れななむとぞ思ふ(5)」といへる返りごと、暮るともなにのしるしもあるまじ、つねよりも今宵は宿直する者などあれば、夜しも関守のまさるよしいひたれば、男、

逢坂の関は夜こそ守りまされ暮るればなにをわれ頼むらむ

返し、女、

守りませど夜はなほこそ頼まるれ寝る間もあらば越さむと思ふに(6)

といひつつあり経るに、かの男、いといたううらみなどしければ、女いひたる、「よし、なほおほかたにて見せむ。月おもしろきほどに」といへば、来たり。簀の子に呼びすゑて(7)、姉妹どもなど、口々をかしくいひけるに、よし、これもて心ざしは見せむとて、などかかる人目を、いかでかはしのぶべき(8)、つつむことだになき身ならばこそあらめ。夜明けぬれば、男帰りて、いひおこせたり。

うちかはし誓はぬそでを雨雲と降りし時雨は月に見えけむ

などぞいひたる。

（『平中物語』による）

問1 傍線番号(1)の「なり」と文法的に同じものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 **35**

① 女もしてみんとてするなり。

② 寺のさまもいとあはれなり。

③ 仏には人のなりたるなり。

④ 扇のにはあらず、くらげのなり。

⑤ 静かなりつる御遊び……

問2 傍線番号(2)「『そのおもしろかなる菊一枝折りて』といひおこせたりければ」とあるが、女がこのように言ってきた理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 **36**

① この男の家の前栽が趣向をこらしたものであるのは有名だったので、ぜひ見て自分で楽しみたいと思ったから

② この男からはいつも文が届いているが、それとは別に何か自分への愛情を示して欲しいと思ったから

③ 別の男からもらった文への返事に添える花として、この男の庭の菊が欲しいと思ったから

④ 別の男からもらった文に添えるのだと、使いの口から男に伝われば自分のことをあきらめてくれると思ったから

⑤ いつもこの男から届く片思いの文へ、返歌するときに添える花として欲しいと思ったから

問3 傍線番号(3)・(6)・(8)の口語訳として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 **37** ～ **39**

(3) われよりはまたあらじと思はむ **37**

① 私からもう再び文は届かないと思った方がよい
② 私の菊より美しい菊は存在しないと思うことだ
③ 私よりはあなたは私を愛していないと思うことだ
④ 私は二度とあなたを恋しいと思わない
⑤ 私より愛情の深いものはまたとあるまいと思う

(6) 頼まるれ **38**

① 信頼なさる
② 信頼させられる
③ 頼みにできる
④ 頼りにしよう
⑤ あてにならない

(8) いかでかはしのぶべき 39

① どうやって恋心を我慢すればよいのか
② どうして他人に知られずに思いをかわせようか
③ どうして彼女を心から信じられようか
④ どのくらい苦しみに耐えられるだろうか
⑤ どうしてこっそり会わなくてはならないのか

問4 傍線番号(4)「われさへ浮きて流れよりけむ」に表れた女の心情の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 40

① 世の中の流れに身を任せてしまったことよ、とうわついた自分を嘆いている
② あなたの愛情に私も心をひかれています、と恋心を告白している
③ 一度は断ったけれど今はあなたの方に寄っていきたい、と謝っている
④ 別の男のところからあなたのところへ戻っていいですか、と尋ねている
⑤ 別の男の情熱につい押し流されてしまったのだ、と言い訳をしている

問5 傍線番号(5)・(7)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 **41** ・ **42**

(5) 暮れななむ **41**

① ラ行下二段活用動詞の連用形＋完了の助動詞＋願望の終助詞
② ラ行下二段活用動詞の連用形＋完了の助動詞＋強意の係助詞
③ ラ行下二段活用動詞の未然形＋完了の助動詞＋強意の助動詞＋推量の助動詞
④ ラ行四段活用動詞の未然形＋願望の終助詞
⑤ ラ行四段活用動詞の已然形＋打消の助動詞＋願望の終助詞

(7) 呼びすゑて **42**

① ワ行下二段活用動詞の未然形＋完了の助動詞
② ワ行下二段活用動詞の連用形＋接続助詞
③ ワ行下一段活用動詞の未然形＋接続助詞
④ ヤ行下二段活用動詞の連用形＋接続助詞
⑤ ヤ行四段活用動詞の已然形＋完了の助動詞

問6　本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 43

① 女が菊の花を欲しがった理由に腹が立ったので、この男は菊を渡さなかった
② 女に言い寄っているのはこの男一人だけであったのに、女は嘘(うそ)をついていた
③ 夜遅く、番人のいない時間帯に、やっとこの男は自分の心を伝えることができた
④ この男は何度も自分の恋心を訴えたが、女はなかなかそれにこたえてはくれなかった
⑤ この男の度重なる文に心を動かされた女は、月の美しい夜に二人だけで会ってくれた

問7　本文の出典である『平中物語』と同じジャンルの作品を、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 44

① 大和物語　② 源氏物語　③ 栄花物語　④ 平家物語　⑤ 十訓抄